

シカゴ学派社会学の流れ

シカゴ学派社会学の流れ		日本社会学におけるシカゴ学派の受容（特に都市社会学）	
1889	ハル・ハウスの開設⇒シカゴのスラムに設けられた施設を拠点としたセツルメント事業。シカゴのスラム居住者のための慈善事業、都市環境の改善運動をはじめ、婦人・児童の保護立法制定に貢献（大澤 1993）。	初期シカゴ学派第一世代	「学派」としてのシカゴ社会学（秋元律郎） もちろんわれわれが、シカゴ社会学をひとつの「学派」として取り扱っていかうとすれば、どこまでもいくつかの不明確さがつきまとうことになる。まず学派という概念じたいが、これまでもはっきりした規定を欠いたまま、ある程度恣意的な使い方をされてきたという問題とともに、とくにここではシカゴ学派が、さまざまな時間的な幅と異なったパースペクティヴからの接近を許しているという事情がある。したがってもし「シカゴ社会学」（Chicago Sociology）ないし「シカゴ学派」（Chicago School）といった命名のもとに一定の構成をとうとすれば、そこに組み込まれてくる社会学者や理論は座標の立て方とともに、評価的視点をもまじえて、論者じしんの立場につよく制限されることになろうし、またさらに特定の理論的ないし方法的志向性のうちに、学派としての実体を求めているとすれば、その姿はきわめて多様で曖昧なかたちをみせることになる。（秋元 1989: 1-2）
1892	シカゴ大学社会学科がスモールによって創設される。⇒初代学科長のスモールは、バプティスト教会の牧師でもあり、社会科学の研究を通じて、社会改革を追求しようとしていた（松本 2008） ブース『ロンドン民衆の生活と労働』（～1903年）⇒ロンドンにおける貧困を統計的に明らかにするため、全市にわたる踏査を開始し、十数年に及ぶ成果をまとめたもの。シカゴ学派などにも影響を与えた（町村 1994）。		
1894	デュイがミードとともにシカゴ大学に赴任⇒ミードは哲学、論理学、倫理学、社会心理学を講義（船津 1996）		
1899	パークがドイツに留学（～1903年）。ベルリンではジンメルの講義に出席した（松本 1999）		
1902	（クーリー『人間性と社会秩序』⇒他者に対して自己がどう見えているのかの想像、他者が自己をどう判断しているかの想像、そして誇りや恥のような自己感情、こうした3つの側面を自己と他者との関係のなかで描くことで「鏡に映った自己」を論じている（西原 1994））		
1903	ジンメル「大都市と精神生活」	初期シカゴ学派第二世代	トマスとズナニエツキの分析の焦点 トマスとズナニエツキによる社会の分析焦点は、特定の社会や共同体や集団に見出される特有の社会的価値（「ある社会集団の成員に接近可能な経験的内容をもち、それが活動の対象となり、またなりえるという点で意味を有する経験的所与のこと」（Thomas and Znaniecki 1918-20[1958]=1983: 21））と態度（社会的価値に対応する個人の意識過程であって、行為に関連し、行為を通して一定の社会的価値と結びついている）を把握し、それらが人びとの行為にいかに影響を与え、さらにこれら一連の行為を通じて社会生活がどのように生成していくのかを明らかにすることにある。彼らは社会的価値や態度を補足的に説明するため、集団の行動規則やその束である社会制度さらに集団の制度全体を示す社会組織の概念や社会解体・社会再組織化のアイデアを、あるいは個人が有する態度のパターンを示すために社会的パーソナリティやその類型を導入している。 ⇒理論的視点は社会的価値と個人の意識過程を総合した行為論（宝月 2010: 46より作成）
1905	アメリカ社会学会の設立。スモールが関与（船津 1999）		
1906	『アメリカ社会学雑誌』がアメリカ社会学会の機関誌となる		
1910	「初期シカゴ」時代の始まり（～1930年代）（奥田 2005）		
1912	パークがトマスに招かれてシカゴ大学の教員（非常勤講師）として赴任		
1913	ミード「社会的自我」「社会的自我」（邦訳 1991年）	初期シカゴ学派第二世代	ミードの理論的視点：有意味シンボル、意味世界、反省的思考（宝月誠） ①人びとが他者とともに協同して営む人間社会の基盤は、本能ではなくて、有意味シンボルに基づくコミュニケーションにあること。 ②社会において人びとの間で組織的な行為が可能になるのは、人びとに「一般化された社会的態度」を呼び起こす意味世界（意味の体系）によるものであること。「一般化された社会的態度」を取得することによって、各自は対象についての共通の意味を呼び起こし、社会の観点から、自らの行為をコントロールし、社会的な人間になる。 ③人びとは問題状況に直面すると、それを解決するために有意味シンボルを用いて内的な会話を行う。そして、こうした反省的思考を通じて新たな行為を案出する。社会は意味世界によって条件づけられているだけでなく、反省的思考によって新たな行為が創発され、社会は絶えず生成していく。（宝月 2010: 48より作成）
1915	トマスが社会学講師として赴任		
1916	バージェスがシカゴ大学に助教授として赴任		
1918	トマス&ズナニエツキ『生活史の社会学——ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（-1920）（邦訳 1983）⇒自伝を含む個人的記録を利用し、資料と理論との統合をはかろうとしたアメリカにおける経験的社会学研究の古典（桜井 1995） トマスがスキャンダルによってシカゴ大学を去る		
1920			
1921	パーク&バージェス『科学としての社会学入門』（グリーンバイブル）⇒社会学における影響力のもっとも大きな書物との評価（Faris 1967=1990）。パークは「社会学で学生が一番最初に学ばねばならないのは、観察ししかもその観察を記録することである」と叙述。自然主義的观察眼を重視したパークの指導方針が反映。（古原 1994）	戸田貞三がシカゴ大学に留学⇒東京帝国大学講師であった戸田が文部省から社会事業の研究のために欧米留学を命ぜられる。シカゴ大学ではもっぱら社会学の講義を聞く。家族論と社会調査論への手掛かりを得た（小笠原 2000）	
1922	ミード「意味のあるシンボルについての行動主義的説明」「社会的自我」（邦訳 1991年）		

都市社会学以前

1923	アンダーソン『ホーボー』（邦訳 1930年、改訳 1999-2000年） パークがシカゴ大学の正教授になる。 シカゴ大学で地域コミュニティ調査委員会が結成⇒ロックフェラー財団による研究資金は大学院学生の調査研究の資金や国勢調査データのシカゴ市地区別集計などの基礎データを集めるプロジェクトの資金となった（松本 1999）。
1925	パーク&バージェス『都市』（邦訳 1972年） ミード『自我の発生と社会的コントロール』『社会的自我』（邦訳 1991年）
1927	スラッシャー『ギャング』 マウラー『家族解体』⇒統計的方法と質的方法を巧みに組み合わせることで、離婚と遺棄という生々しい現象である家族解体を見事に描き出すことに成功した（中野 1997）。 バージェス『社会調査の方法としての統計とケーススタディ』⇒統計的方法もケーススタディ双方への同等の認識とそれぞれの技法を遂行するための機会が与えられるべき。双方の相互作用は実り多いものになると言明（中野 1997）
1928	ワース『ゲッター』（邦訳 1981年） キャバン『自殺』
1929	ゾーバー『ゴールドコーストとスラム』（邦訳 1997） ショウ『非行地域』 アメリカで大恐慌が発生⇒これにより、全国の実社会学者たちはより巨視的で全体社会的、国際的問題に注目するようになり、理論的、経験的な把握の必要性が叫ばれるようになる。社会学に対する時代的な要請は、都市内の集団過程や社会問題ではなく、大規模な組織や社会構造の問題へとシフトしていく。『グリーン・バイブル』が社会学教育の需要を満たさなくなってくる（吉田・寺岡 1997）
1930	シカゴでセンサスを実施⇒シカゴを75の「地域コミュニティ」に区分し、その単位ごとに集計を行った。その後国勢調査の度ごとに作成され、現在まで続いている（松本 1999）。
1931	ショウ&マッケイ『少年非行の社会的要因』 ミード死去
1932	クレッシー『タクシー・ダンスホール』
1933	レックレス『シカゴの悪徳』 パークがシカゴ大学を退職
1934	ミード『精神・自我・社会』（邦訳 1973年、新訳 1995年）
1936	ヘイナー『ホテル・ライフ』
1938	ワース『生活様式としてのアーバニズム』（邦訳 1965）⇒ワースは、都市を「相対的に規模が大きく、社会的に異質な諸個人からなる、永続的な居住地」と定義する（Wirth 1938）。つまり、都市の要件を、人口規模、密度、社会的異質性に求め、これらの変数を独立変数として、「生活様式としてのアーバニズム」を演繹しようとするのである。ワース理論が「生態学的決定論」の典型とされるゆえんである。
1942	ショウ&マッケイ『少年非行と都市エリア』

初期シカゴ学派第二世代

パークの都市論：「よそ者の社会学的重要性」、競争→闘争→応化→同化（山口寛）

パークはドイツ留学の際に指示したジンメルにならって、「よそ者の社会学的重要性」を考えた。彼はまた「人間生態学」を提唱し、人間の「自然」な欲求の発現による社会解体という現象と、そこから社会が再構成される様相を捉えようとした。そうしたなかで生まれた「競争・闘争・応化・同化」という4つのプロセスによる集団間関係の変化に関するモデルはよく知られている。たとえば、移住当初の貧しい移民は、アメリカ社会のマジョリティ集団である「WASP」を中心としたさまざまなエスニック集団との「競争」関係に入る。より良い居住地を確保するために、他の集団と地代をめぐる「競争」をするが、より高い住居費を支払える人びとがより良い場所に住むことができるため、貧しい人びとに勝ち目はない。そうした集団間関係がもつ直接的な対立を意味する「闘争」状態に入ることもある。エスニック集団間、ギャング間、労使間の対立などがその例である。そうした闘争の結果として妥協点が見出されるようになると、安定した集団間の関係を意味する「応化」状態となる。さらに集団相互の差異が消滅した状態が、「同化」である。また、競争や闘争の過程で形成されるエスニック集団の集住地区などは「自然地域」ないし「自然発生地域」（Park 1929=1986: 21）あるいは、「コミュニティ」と呼ばれる。そうした場所は、たとえば、それぞれの社会集団の成員がいかなる居住パターンを有しているか、つまり集住しているか分散居住しているかを確認するための「社会地図」によっても表現されていく。

パークの思想では全体社会としての「アメリカ社会」が前提とされ、それに対する「よそ者」の同化＝統合がひとつの目標として考えられていた。バラバラで対立し合い「社会解体」を招きかねない近代都市の人びとは、時とともに平等＝均質な近代国家の国民へと変化するであろうし、そうあるべきだとされたのである。ある種のナショナリズムが研究の思想的背景にあったといえるかもしれない。（山口 2006: 8-9）

シカゴ学派都市社会学の理論的特徴：社会解体論と生態学的決定論（松本康）

- ①**社会解体論** シカゴ学派の都市研究を貫く基本的視点。トマスにとって、社会解体はシカゴに移住してきたポーランド農民が新しい経験をおとして態度を変容させ、再組織化へと向かうための構造的条件であった。パークとバージェスも、この見解を継承し、社会解体は都市的環境における人間行動を理解する鍵であると強調した。実際、シカゴ・モノグラフは、豊かな都市の現実を扱いながら、ほとんど例外なく社会解体論の鋳型にはめていった。最後に、社会解体論は、ワースによって大衆社会論として継承された。
- ②**生態学的決定論** 社会解体を引き起こす要因を「都市」という生態学的形態に求める立場。この理論的立場は、パークによる混沌とした都市の記述の根底にすえられていた（Park 1925）。それを明確な理論図式に仕立て上げたのはワースであった。ワースの「生活様式としてのアーバニズム」は、都市の「規模・密度・異質性」が生み出す社会的・心理的効果の総体にほかならない。（松本 2000: 29-30より作成）

戸田貞三『社会調査』⇒社会調査を科学的に確立することを主張（千田 1995）。社会事業研究の系譜に強く影響されつつも、科学としての社会調査が急速に制度化されつつあったシカゴの状況に目を奪われる（玉野 2004）。

ワースのアーバニズム論（松本康）

ワースは、規模、密度、異質性を変数を出発点として、錯綜した論理を展開する。規模、密度、異質性は、相互に絡み合いながら、次の三つの帰結を生む。第一に、空間的な凝離である。都市の密度が、空間をめぐる競争を引き起こし、空間的な分化を生み出す。ここでは、シカゴ学派の生態学的な視角が、空間をめぐる経済的な競争に、純化されている。第二に、親密なコミュニティの衰退と「都市的」な社会関係の成立である。親族・近隣等の第一次の関係は弱まり、表面的・一時的な「第二次的」関係が支配的になる。ワースはさらにその延長線上に、「無関心」「慎み」「飽き」といったジンメル流の都市的パーソナリティを位置づけ、都市が個人に対して「自由と解放」を意味すると同時に、参加の感覚の喪失や無秩序への傾向をはらむと論ずる。ここに、パーク以来のシカゴ学派の社会解体論が、明瞭に表現されている。第三に、社会的分業の発達と流動的な大衆の形成である。規模・密度・異質性という生態学的な特性から、これらの社会組織・社会心理を演繹する論理には無理があるが、ここには、一九三〇年代の大衆社会化に向かうアメリカ都市のリアリティが表現されているともいえる。ともあれ、ワースは、これらの特徴を「生活様式のアーバニズム」と呼び、「規模が大きければ大きいほど、密度が高ければ高いほど、そして異質性が高ければ高いほど、アーバニズムの特徴は促進される」という。そして、これらの生活様式は、農村へと伝播していくと考えるのである。（松本 1995: 12-3より作成）

1943	ホホワイト『ストリート・コーナー・ソサイエティ』（邦訳 1979年、第3版 1981 邦訳 2000年）⇒スラム問題の本質は社会解体にあるのではなく、スラムの社会秩序が周囲のそれと異なる点にあると指摘。これが論文審査の過程で論争点となり、ワースとの間で激しいやり取りがあったと伝えられている（松本 2002）
1946	「セカンド・シカゴ」時代の始まり（～1980年代）（奥田 2005）
1949	サザランド『ホホワイト・カラー犯罪』（邦訳 1955年）
1952	ジャンウィッツ「有限責任のコミュニティ」⇒地域コミュニティ概念を従来のゲメインシャフト・モデルから解放し、コミュニティ新聞や自発的結社に支えられた「退出自由」のコミュニティとして定式化した（松本 2002）
1953	サザランド『ホホワイト・カラー犯罪』（丸秀康、中野正大） 当時のシカゴ学派犯罪学の主な研究対象は、下層階級のブルーカラーや青少年少女による街頭犯罪であった。サザランドは社会的地位の高い人びとや企業の「犯罪」が刑法以外の法律に違反するため犯罪とは見なされず、メディアによる追求も弱く、人々の関心が向かないのだと主張（丸 2009）。 既存の理論では処理できない例外的なケースを問題状況と受け止めて、それを解決するために新たな概念や理論を探究することは、ミードのプラグマティズムの科学的探究の実践である（中野 2003）。
1954	
1957	
1959	
1961	ゴッフマン『アサイラム』（邦訳 1984） ジャンウィッツがシカゴ大学に赴任⇒かつてのシカゴ学派の伝統を再生しようと精力的に努力（吉田・寺岡 1997）
1962	ガンス『都市の村人たち』（改版 1982、邦訳 2006）
1963	ベッカー『アウトサイダーズ』（邦訳 1978年）⇒「社会集団は、これを犯せば逸脱となるような規則をもうけ、それを特定の人びとに適用し、彼らにアウトサイダーのレッテルを貼ることによって、逸脱を生み出すのである」（Becker 1963=1978: 17）。ラベリング理論は統制する側と統制される側の相互作用過程に照準をあわせて逸脱の社会学の構築をめざすことでキツセラの社会構築主義アプローチの展開を準備するものであった（村上 1995）。
1965	グレイザー&スト劳斯『死のアウェアネス理論と看護』（邦訳 1988年）⇒グラウンデッド・セオリーの発見は、比較グループの活用を通じてうながされる。いくつかのグループを比較することによってすぐに、理論カテゴリーを生み出す類似性と差異が明らかになる。こうして生じるカテゴリーの強さは、多様なグループからのデータ収集によって検証される。本書では、死亡した未熟児がまず研究され、そこで生成された概念が末期がんの患者で検証された（Merriam and Simpson 2000=2010）。
1968	グレイザー&スト劳斯『データ対話型理論の発見』（邦訳 1996年）⇒グラウンデッド・セオリーの提唱。 ショウ『ジャック・ローラー』（邦訳 1998年） サトルズ『スラムの社会的秩序』 ガーフィンケル『エスノメソドロジー』（邦訳 1987年）

第二次シカゴ学派―ネオ・シカゴ第一世代

都市社会学研究の成立期（～60年）（鈴木 1985） 矢崎武夫がシカゴ大学に留学（～1952年）⇒ワースらから都市社会学を学ぶ（富永 2004）
磯村英一『都市社会学』⇒都市社会の理論。都市を「人類の集団」が「特定の地域」に「結合の媒体」を通じて集まったものとし、都市社会の地域的形態をあらわす概念化として、バージェスがシカゴを対象として定式化した「同心円説」に到達する。パーク、バージェス、マッケンジーらの人間生態学、ワースのアーバニズム論に至るまでシカゴ学派の諸理論に影響を受けている（富永 2004）
磯村英一『都市病理学』⇒『都市社会学』と合わせて、敗戦直後の、破壊され、衣食住職の生活要件のみでなく、道徳的統合を欠くアノミー状況下における被占領風俗を素材として病理モデルとしての都市を記述。方向としてシカゴ学派の「解体」説につながる（鈴木 1985）
矢崎武夫「都市研究方法の発展」⇒ワースの受容（高山 2008）
奥田道大『アメリカ都市社会学におけるUrban Personality 研究の方向』⇒ワースの受容（高山 2008）
磯村英一『都市社会学研究』⇒セカンド・シカゴの都市的パーソナリティ、アーバニズム理論を主な柱立てとしている（奥田 2005）。仮説構成にワースのアーバニズム理論を応用（高山 2008） 倉沢進「都市化と都会人の社会的性格」⇒磯村と同様、仮説構成にワースのアーバニズム理論を応用（高山 2008）
都市社会学研究の展開期（～72、3年） 日本社会学会大会の「都市化の理論」シンポジウムでワースを議論
奥田道大がブランダイス大学に留学、ヒューズの講義を受ける（奥田 2005）。 矢崎武夫『日本都市の発展過程』⇒日本社会の構造はアメリカの社会構造とは相当相違があるので、アメリカ都市社会構造理論を用いたところで、ある側面は明らかにできても、全体理論からは妥当性を欠く点もあるのではないかと考えた。日本の都市社会学は日本の現実に密着したものであることの必要を痛感した（矢崎 1962）。
鈴木広訳編『都市化の社会学』⇒シカゴ学派都市社会学の理論を翻訳
グラウンデッド・セオリー・アプローチの理論的系譜（シャーマズ） グレイザーはコロンビア大学でラザーズフェルドやマートンの影響を受け、感情に動かされない実証主義、厳密に体系化された方法、データから浮かび上がってくる発見、そして、量的調査法の影響を受けたいくぶんの不明瞭な専門用語をグラウンデッド・セオリー・アプローチに取り込んだ。スト劳斯はブルーマーとパークの影響を受け、シンボリック相互作用論とエスノグラフィー研究をグラウンデッド・セオリーに取り入れた（Charmaz 2006=2008）。
ブルーマーの2つの方法論的特徴（片桐雅隆） ①経験的な研究は、どのように経験的な世界を見るか、どのように問題を立てるか、どのようにデータを選定し、どのようにデータ間の関係を確定するか、どのようにデータを読むか、そしてそれらの前提としてどのような概念を用いるのかという、一連の過程の中で考えられるべき。 ②経験的な研究は経験的な世界の検証にかけられ、その検証を通して確認されなくてはならない。探索（経験的世界に深く入り込む過程）と精査（探索を基にして理論化していく過程）の2つの過程（片桐 2008）

1969	『グリーンバイブル』の再版⇒かつてのシカゴモノグラフの再版されていく。ジャノヴィッツが仕掛人となって起こした一連の「シカゴ・ルネッサンス」の一環（吉田・寺岡 1997） ブルーマー『シンボリック相互作用論』（邦訳 1991年） 【批判】カステルのシカゴ学派批判⇒「資本主義的産業化、市場経済の出現および現代社会の合理化過程の文化的表現」（Castells 1968=1982）にすぎないアーバニズムにもとづく都市社会学は、「自由主義段階の資本主義の社会形態の結晶体に自民族中心主義的に結び付けられた現代風のイデオロギー」（Castells 1969=1982）であると批判。
1970	【批判】グールドナー『社会学の再生を求めて』（邦訳 1978年）⇒シカゴ学派社会学の仕事はより高度で科学的であるが、それらは共通して小集団の研究に焦点を合わせており、パースペクティブは共通して非歴史적である。伝統的に歴史的なパースペクティブをもつマルクス主義社会学とは区別される（Gouldner 1970=1977）。
1972	サトルズ『コミュニティの社会構成』⇒ジャノウィッツやハンターの議論を踏まえ、地域コミュニティをテリトリーに基づく重層的な空間的秩序として概念化する試み（松本 2002）
1973	【批判】ハーヴェイ『都市と社会的不平等』（邦訳 1980年）⇒新古典派ミクロ経済学やシカゴ学派都市社会学を均衡論的変動論に陥っていると批判する一方で、マルクスのいよう価値と交換価値の概念、さらに地代論をベースに据えてもう1つの地理学を提唱している（吉原 2008）。
1974	ハンター『シンボリック・コミュニティ』⇒地域コミュニティの本質が、集合表彰としての文化的な空間定義にあることを主張するもの（松本 2002）
1976	
1977	カステル／メラー／フィッシャー『都市の理論のために』（邦訳 1983年）⇒フィッシャーらネオシカゴ学派とカステルらシカゴ学派に批判的な新都市社会学との誌上シンポジウム。
1979	ウェルマン「コミュニティ問題」⇒コミュニティ喪失論、コミュニティ存続論、コミュニティ解放論
1983	カステル『都市とグラスルーツ』⇒新都市社会学の立場でありながら、シカゴの方法論も受容し、参与観察を行う。
1984	フィッシャー『都市的体験』⇒ネオ・シカゴ
1986	フィッシャーの下位文化理論（フィッシャー） ワースのアーバニズム論を批判的に継承。都市の定義を人口の集中（都市度）のみに求める。1978年の段階でフィッシャーが提示した都市度と下位文化の関係を示した命題は主に以下の4つ。 命題1: 地域が都市的になればなるほど、下位文化の多様性が増大する。 命題2: 地域が都市的になればなるほど、下位文化の強度が増大する。 命題3: 地域が都市的になればなるほど普及の源泉が増加し、下位文化への普及が増大する。 命題4: 地域が都市的になればなるほど、非通念性の程度が増大する。（Fischer 1975=1983）
1987	
1988	
1989	
1990	「セカンド・シカゴ以降」の始まり（～現在）（奥田 2005） ストラウス&コービン『質的研究の基礎』（邦訳 1990年 [原書第二版 1998年、邦訳 2004年]）⇒グラウンデッド・セオリー・アプローチの初学者向けテキスト。手順を非常に具体的あるいは模式的に示そうとした（木下 2006）
1995	グラノヴェター『転職』⇒ネオ・シカゴ

第二次シカゴ学派 | ネオ・シカゴ第二世代

高橋勇悦『現代都市の社会学』⇒アーバニズム理論は日本に定着した（高山 2008）
都市社会学者の世代間比較：第二世代のシカゴ評価（鈴木広） 鈴木広（1987）は『都市の理論のために』のカステル、メラー、フィッシャーの3論文を評し、次のように論じている。 概していえば、欧米の諸先進国に比べ、比較的最近までマルクス主義が社会学をふくむ社会科学のなかできわめて大きな位置と比重を占めてきたわが国の場合、いまになって突然『新都市社会学』などと、まったく新しい問題提起であるかのように錯覚をともないつつ、しかも欧米製の舶来品を輸入してきたからといって、知的生活史上、偶然はじめて左派の思考に当面した若年世代にとってはともかく、一般にはほとんど知的衝撃にはならないであろう。事実、カステル、メラー、フィッシャーの三論文を読み比べてみても、中範囲の法則を志向するフィッシャー論文が格段に光っており、他の二点は明らかに見劣りがする（と私は思う）」（鈴木 1987: 230-231）。 鈴木は、1931年生まれで1953年に大学を卒業して、大学院に進学している。倉沢は1934年生まれ、高橋は1935年生まれ、奥田は1932年生まれで、かれらは、日本の都市社会学においては第二世代と呼ばれている。一方、鈴木が「若年世代」と呼んでいるのが、新都市社会学を積極的に受け入れた吉原直樹（1948年生）、園部雅久（1950年生）、町村敬志（1956年生）らであり、第三世代と呼ばれている。
倉沢進「都市的生活様式論序説」⇒アーバニズム理論を乗り越えようとする野心的な論考（高山 2008）
奥田道大『都市コミュニティの理論』 吉原直樹『都市社会学の基本問題』 矢澤修次郎『現代アメリカ社会学史研究』 佐藤郁哉『暴走族のエスノグラフィー』
都市社会学研究の転換期（～94年）（和田 2004） 町村敬志「『原型』としての都市社会学」『都市』
鈴木広・倉沢進・秋元律郎編『都市化の社会学理論』 鈴木広「アーバニゼーションの理論的問題」『都市化の社会学理論』⇒カステルらの批判を受けた後の1980年代のシカゴ学派再考の文脈で、アーバニズム理論を再検討（高山 2008）
奥田道大らによる「池袋／新宿調査」の開始（～2003）⇒大都市インナーエリアを対象に越境系ニューカマーズを調査（奥田 2005） 秋元律郎『都市社会学の源流』
都市社会学の再編期（～現在）（和田 2004）

都市社会学第二世代

都市社会学第三世代

1999	ネオ・シカゴが「ネオ」である理由（松本康） ①生態学的決定理論を回避しつつ都市の効果を説明しようとした。 ②社会解体論によらずに都市の効果（非通念性）を説明しようとした。 ③ネットワーク分析による検証可能性への道を開いた。 ⇒重要なのはアーバニズムの理論を一種の「連帯理論」として構築しようとした点。フィッシャーの下位文化理論は、ウェルマンの「コミュニティ問題」、ティリーの「動員理論」、グラノヴェッターの「埋め込み理論」と同様の理論的貯留に属している。（松本 2002: 36より作成）	木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』⇒データの深い解釈を重視するストラウスのスタイルと研究方法としての対形成が結果として分析を促進できるというグレイザーのスタイルを統合した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを提案（木下 2006） 森岡清志編『都市社会のパーソナルネットワーク』 大谷信介『現代都市住民のパーソナルネットワーク』 倉沢進・浅川達人『新編 東京圏の社会地図 1975-90』⇒社会地区分析。国勢調査、事務所・企業統計調査などのデータを用いて社会地図を作成し、20世紀末の東京大都市圏の姿を描き出した（浅川 2010）。
------	--	--

参考文献

秋元律郎，1989，『都市社会学の源流』有斐閣.

浅川達人，2010，「都市調査の系譜と最前線」日本社会学会社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善，744-5.

Becker, Howard S., 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, New York: The Free Press.
（＝1978[1993], 村上直之訳『アウトサイダーズ』新泉社. ）

Castells, Manuel, 1968, "Sociologue du Travail", Pickvance, C.G ed., *Urban Sociology*. London: Curtis Brown. （＝山田操・吉原直樹・鯉坂学訳, 1982, 「都市社会学は存在するか」『都市社会学——新しい理論的展望』恒星社厚生閣.）

Castells, Manuel, 1969, "Sociologue et Societe," Pickvance, C.G ed., *Urban Sociology*. London: Curtis Brown. （＝山田操・吉原直樹・鯉坂学訳, 1982, 「都市社会学における理論とイデオロギー」『都市社会学——新しい理論的展望』恒星社厚生閣.）

Charmaz, Kathy, 2006, *Constructing Grounded Theory: A Practical Guide through Qualitative Analysis*, London: Sage. （＝2008, 抱井尚子・末田清子監訳『グラウンデッドセオリーの構築——社会構成主義からの挑戦』ナカニシヤ出版. ）

Fischer, Claude Serge, 1975, "Toward a Subcultural Theory of Urbanism," American Journal of Sociology, 80(6). （＝1983, 奥田道大・広田康生編訳「アーバニズムの下位文化理論に向けて」『都市の理論のために』多賀出版，50-94. ）

船津衛，1996，「ミードの理論」新明正道・鈴木幸壽監修『現代社会学のエッセンス 改訂版——社会学理論の歴史と展開』ぺりかん社，115-30.

———，1999，『アメリカ社会学の展開』恒星社厚生閣.

Gouldner, Alvin, 1970, *The Coming Crisis of Western Sociology*, New York: Basic Books. （＝1978, 岡田直之のほか訳『社会学の再生を求めて』新曜社. ）

宝月誠，2010，「シカゴ学派社会学の理論的焦点」『立命館産業論集』45(4): 45-65.

片桐雅隆，2008，「シンボル・意味・相互行為——H.G.ブルーマー『シンボリック相互作用論』」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス 第1巻 自己・他者・関係』世界思想社，43-52.

木下康仁，2006，「グラウンデッド・セオリーと理論形成」『社会学評論』57(1): 58-73.

町村敬志，1994，「ブース」見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂，760.

丸秀康，2009，「ホワイトカラー犯罪」矢島正見・丸秀康・山本功編『改訂版 よくわかる犯罪社会学入門』学陽書房，146.

松本康，1995，「現代都市とコミュニティ、ネットワーク」『21世紀の都市社会学 1 増殖するネットワーク』勁草書房，1-90.

———，1999，「シカゴ学派の社会地図」倉沢進編『都市空間の比較社会学』放送大学教育振興会，52-70.

———，2002，「『ネオ・シカゴ学派』の都市社会学——シカゴ学派とハーバード構造主義の交差」『社会学史研究』24: 29-43.

———，2008，「シカゴ学派の都市研究」高橋勇悦監修・菊池美代志・江上涉編『改訂版 21世紀の都市社会学』学文社，15-28.

Merriam, Sharan B. and Edwin L. Simpson, 2000, *A guide to Research for Educators and Trainers of Adults: 2nd ed.*, Malabar, Fla.: Krieger Pub. （＝2010, 堀薫夫監訳『調査研究法ガイドブック——教育における調査のデザインと実施・報告』ミネルヴァ書房. ）

村上直之，1995，「ベッカー『アウトサイダーズ』」『社会学文献事典』弘文堂，523.

中野正大，1997，「社会調査からみた初期シカゴ学派」宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究——初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣，3-37.

———，2003，「シカゴ学派とは」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社，4-42.

西原和久，1994，『社会学的思考を読む』人間の科学社.

大淵憲一，2006，『心理学の世界 専門編 4 犯罪心理学——犯罪の原因をどこに求めるのか』培風館.

小笠原真，2000，『日本社会学史への誘い』世界思想社.

大澤善信，1993，「ハル・ハウスと社会学者ジェーン・アダムス」吉原直樹編『都市の思想——空間論の再構成にむけて』青木書店，158-74.

奥田道大，2005，「シカゴ学派社会学と21世紀という時代——セカンド・シカゴ以降を射程として」『年報 社会科学基礎論研究』4: 150-72.

桜井厚，1995，「トマス&ズナニエツキ『生活史の社会学』」『社会学文献事典』弘文堂，46-7.

佐藤郁哉，2002，『組織と経営について知るための 実践フィールドワーク入門』有斐閣.

鈴木広，1985，「概説 日本の社会学 都市」鈴木広・高橋勇悦・篠原隆弘編『リーディングス 日本の社会学 7 都市』東京大学出版会，3-16.

———，1987，「アーバニゼーションの理論的問題」鈴木広・倉沢進・秋元律郎『都市化の社会学理論』ミネルヴァ書房，229-60.

高山龍太郎，2008，「都市的生活様式——L.ワース「生活様式としてのアーバニズム」」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス 第4巻 都市的世界』世界思想社，13-22.

玉野和志，2004，「都市社会研究の技法」園部雅久・和田清美編『都市社会学入門——都市社会研究の理論と技法』文化書房博文社，251-78.

富永健一，2004，『戦後日本の社会学——一つの同時代学史』東京大学出版会.

和田清美，2004，「日本都市社会学研究史——課題と方法」園部雅久・和田清美編『都市社会学入門——都市社会研究の理論と技法』文化書房博文社，52-92.

山口覚，2006，「シカゴ学派都市社会学」加藤政洋・大城直樹編『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房，4-16.

矢崎武夫，1962，『日本都市の発展過程』弘文堂.

吉田竜司・寺岡伸悟，1997，「シカゴ学派成立のマニフェスト——ロバート・E・パーク、アーネスト・W・バージェス『科学としての社会学入門』」宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究——初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣，95-130.

吉原直樹，1994，『都市空間の社会理論』東京大学出版会.

———，2008，「新しい都市社会学へ——D.ハーヴェイ『都市と社会的不平等』」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス 第4巻 都市的世界』世界思想社，229-38.